

武門平氏の思想と信仰 ——門の思想と厳島信仰をめぐって——

大山 眞一
日本大学大学院総合社会情報研究科

Philosophy and Faith of Samurai Clan of Taira —Consideration of Clan Philosophy and Itsukushima Worship—

OYAMA Shinichi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This bulletin is an extension of the study results of “The Thoughts and Beliefs of Bando Musha” and “Philosophy and Faith of Samurai Clan of Minamoto.” The objective is to close in on the real image of Samurai Clan of Taira which took a different course from Samurai Clan of Minamoto, by examining the philosophy and Itsukushima worship initiated by the clan leader, Taira no Kiyomori, under the theme, “Philosophy and Faith of Samurai Clan of Taira.” In comparison with the loyalty and Hachiman God worship practiced by Clan of Minamoto, the study focuses on whether Clan of Taira had a system for thought control in their Itsukushima worship as in the case of Clan of Minamoto.

序

今回の論考は、拙稿「坂東武者の思想と信仰」¹と「武門源氏の思想と信仰」²の研究の延長線上にある。源平両氏の思想と信仰を論点に中世武士の実体を明らかにし、考察をより深めたいと思う。その前に、過去の研究をざっと振り返っておきたい。

「坂東武者の思想と信仰」では、『将門記』『源平闘諍録』における兵の思想や信仰を、彼らの世界観、宗教観、一族、親族間の複雑な関係、そして平将門、貞盛の相反する主従観から考察した。「武門源氏の思想と信仰」では、『将門記』以降の兵が武士に変容し、源氏が武門を形成する過程を『陸奥話記』『平家物語』『今昔物語集』に求めた。これらの古典文学に記述された武門源氏の実像から、忠義の思想と八幡信仰の相関関係を見出し、武門の思想や信仰の実態に迫ったのである。

上記研究の経緯を踏まえ、本紀要のテーマは、平氏に焦点を当て、「武門平氏の思想と信仰」とするが、主に『平家物語』を手がかりとする。「坂東武者の思想と信仰」で取り上げたように、私営田経営よりも中央政府における栄達を望み、官僚組織における中

央軍事貴族を志向することで原初的な中世武士の道を辿ったのは、平将門ではなく平貞盛であった。その直系である平氏武門の棟梁、平清盛をはじめとする平氏一門の思想や厳島信仰から、武門源氏と異なる系譜を辿った武門平氏の実像を浮き彫りにしたい。

先ず、貞盛流が伊勢で勢力を扶植した経緯や平氏が武門として繁栄した要因について考え、平氏の棟梁清盛の思想の背景となる人物像について理解を深める。続いて、平氏一門の思想を取り上げるが、源氏の忠義の思想と八幡信仰を比較の対象とし、平氏の厳島信仰に源氏のような思想統制のシステムが構築された可能性について考察する。また、平氏の政権においても影に存在する女人の思想や信仰を検証するが、源の義朝の娘の「死にぎま」と二位殿の「死にぎま」を比較しながら、武士を支える女の思想や信仰から平氏一門の思想の一端に触れてみたい。最後に平氏と厳島信仰について論考するが、成り上がり平氏が中央政権に進出し武家政権を確立するためには、院天皇家や摂関家の貴族の帰依する宗教を信仰することが必要最低限の要件だったと思われる。それだけでなく、都から離れた厳島神社を信仰した

清盛の意図はいったい何だったのだろうか。源氏の八幡信仰との対比で厳島信仰について考えたい。

1. 平氏の棟梁清盛

『平家物語』巻第一「祇園精舎」には、平清盛(985-1078)の系譜について次のように記されている。

其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子高視の王、無官無位にして失せ給ぬ。其御子高望の王の時、始て平の姓を給って、上総介になり給しより、忽に王氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂、後には国香と改む。国香より正盛にいたる迄六代は、諸国の受領たりしかども、殿上の仙藉をばいまだゆるされず³。(下線は引用者)

源氏は、嵯峨、仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、村上の各天皇から派生した九流が存在するが、平氏は、桓武、仁明、文徳、光孝天皇の四流に過ぎない。別けても、源氏は清和、平氏は桓武の二流が人口に膾炙していよう。平清盛は桓武天皇の第五皇子である葛原親王の系統で、その子には高棟王と高見王(高視王)があった。高見王は、下線部にあるように、子の高望王が上総に下って平の姓を名乗ったのである。兄の高棟王は公家として中央に残ったが、その系譜には清盛の正室、時子が連なっているのは興味深いところである。高望王には国香、良兼、良将、良孫、良広、良文、良持、良茂の八人の男子があった。良将⁴の子として将門が誕生しているが、清盛は国香の系統である。簡略な系図で表すと次のようになる。国香→貞盛→維衡→正度→正衡→正盛→忠盛→清盛(以下略)。

将門が滅んだ後、坂東は坂東八平氏⁵の諸氏がその勢力を拡大し、相模・武蔵・上総・下総で豪族となり、皮肉なことに、鎌倉時代、源頼朝の鎌倉幕府の有力御家人となっていった。一方、国香の子貞盛は将門を滅ぼし、中央政府に組み入れられた。かつて、拙稿「坂東武者の思想と信仰」において将門と貞盛の主従観の考察を試みたが、両者の主従観には大き

な違いがあった。将門の場合は、中央政府側の太政大臣藤原忠平と親密な関係を持つが、私営田領主兼兵として最終的には東国の独立を目指して国家的謀反を働いた。一方、貞盛の場合は、私営田経営よりも中央政府における栄達を望み、官僚組織における中央軍事貴族を志向することで原初的な中世武士の道を辿ったのである。両者における主従観については、「私」を志向する兵(つわもの)と「公」を志向する兵という差別化ができるが、この両者には、古代から中世の過渡期における、古代の兵から中世武士への転換点ともいえるべき実態が如実にあらわれている。結果的に将門を滅ぼした平貞盛や藤原秀郷、そして源経基らの系譜が官僚組織において官位を与えられ在地領主化した中世武士の祖となっていたのである。その後、貞盛は将門討伐の功により従五位下に叙され、鎮守府將軍、陸奥の守となった。その後の貞盛流がどのようにして伊勢に本拠を置き、伊勢平氏となっていった経緯は定かでないが、貞盛の子維衡が伊勢で勢力を拡大したと考えられる。貞盛の子正度を経て、正衡⁶の代で、伊勢平氏の祖となったのである。その子正盛が伊勢平氏の武門の棟梁となり、承徳二年(1098)、伊賀国山田村・韋田村の私領地を六条院に寄進した。この寄進の背景には、源氏が摂関家と深く結びつき、院の脅威となっていた状況に対し、伊勢平氏と院を結びつかせる正盛の戦略があったと考えられる。なぜなら、六条院は白河上皇の皇女郁芳門院媞子の菩提寺であったからである。この時点で、摂関家と源氏、院と平氏という構図が決定的なものとなった。この間に正盛は僧兵や海賊、そして源義親追討で益々白河院の覚えめでたく、院の軍事機構である北面の武士として仕えた。正盛は西国におけるたび重なる受領就任で富みを蓄え、海賊討伐で西国の武士たちとも関係を深めているが、日本に渡来する宋の商人との密貿易に目をつけたようである。子の忠盛の代になると、白河法皇に寵愛され平氏はその勢力をますます発展させたが、鳥羽院の代になると、忠盛が日宋貿易に着手し、密貿易で巨万の富を蓄えた。しかし、平氏の繁栄は忠盛の子清盛の棟梁としての才覚によるところが大きい。進取の気性、経済力、発想力、独創性、粹にとられない自由闊達な行動力等に鑑みるに、清盛は

武門の棟梁として類稀な資質を持ち合わせていた。就中、平氏の経済力の源となった日宋貿易振興政策は注目に値する。清盛は父忠盛から受け継いだ対宋貿易振興策を更に拡大させるために、瀬戸内航路を整備し、大和田泊を修築した。特筆すべきは、宋銭を輸入し日本経済に流通させたことで対宋貿易が拡大した点であろう。武士である清盛が平安末期において重商主義政策をとって日本経済に活気を与えた革新的な功績には余りあるものがあるが、従前の朝廷による経済を混乱させた理由で、宋銭流通禁止令が發布され、清盛の政策も短命に終わった。しかし、この対宋貿易振興政策が平氏の武家政権を成立させる決定的な原動力となったのである。

ところで、平氏の隆盛は、正盛、忠盛の代でその基礎が固められていたとはいえ、清盛の栄達振りには目を見張るものがある。異常な出生振りといってもいいだろう。『平家物語』巻第六「祇園女御」は清盛の出生について次のように伝えている。

又ある人の申しけるは、清盛は忠盛が子にはあらず、まことには白河院の皇子也。その故は、去る永久の比ほひ、祇園女御と聞えしさいはひ人おはしける。件の女房のすまひ所は、東山の麓祇園のほとりにてぞありける。白河院常は御幸なりけり。(後略)
 7 (下線は引用者)

『平家物語』ではこの後に次のような記述がある。白河院が東山の祇園の寵愛する女のもとに通っていると、その女の家の近くの御堂に鬼のようなものが現れた。白河院は忠盛に鬼を射殺すか切り殺すように命じたが、冷静な忠盛は鬼と思しき者を生け捕りにする。院は思慮深い忠盛に褒美として祇園の女御を下賜された。そして、祇園の女御は懐妊していたので、院は忠盛に「うめらん子、女子ならば朕が子にせん、男子ならば忠盛が子にして、弓矢とる身にしたてよ」⁸と仰った。そうして生まれた男子が清盛だったのである。下線部分では、清盛の出生について白河院の御落胤と断定しているが、清盛が忠盛の子ではなく、白河院の子だという明確な根拠もない。この記述から推測できるのは、忠盛がいかに白河院の寵愛を受けていたということである。その後、忠

盛は海賊討伐で功を立て、大治五年(1130)、正四位下に任ぜられ、鳥羽院に三十三間堂を寄進した功績により、但馬守、刑部卿と進み、武士として初めて昇殿を許されたのである。それ以降、平氏は関を切ったように朝廷内での主要なポストを一門で占めるようになる。忠盛の院への接近と朝廷への布石により、清盛の栄達は生まれながらに約束されていたのも同然といえよう。それにしても、真偽の程はともかく、その後の清盛の朝廷内での栄達を見ると、白河院の御落胤説が信憑性を増してくるのではないだろうか。

拙稿「武門源氏の思想と信仰」において、『今昔物語集』の源頼信の説話をとりあげ、武門の棟梁としての要件には、人格的威光が反映された武威、つまり棟梁の知識と知恵、心ばえや人柄、寛大さといった全人的な威光が必要であると考察した。頼信の時代に、源氏武門の棟梁の資質が伝説化されたことで、武門を束ねる棟梁としての思想が形成され、子の頼義、孫の義家の段階で武門の棟梁像は神域に達したのである。経済力と武力に任せて地方武士を従わせるだけで、棟梁の要件は満たされるのであろうか。清盛の場合はどうであろう。清盛の専横振りや独裁性が強調される余り、圧倒的な武力と経済力に支えられた棟梁としての統率力はあるものの、心ばえや人柄、寛大さに欠けると思われている。しかし、『十訓抄』七ノ二十七では清盛の人柄や寛大さがうかがえるのである。

かやうのかたは、①福原大相国禅門のわかがみ、いみじかりける人なり。折悪しく、にがにがしきことなれども、その主のたはぶれと思ひて、しつるをば、かれがとぶらひに、をかしからぬゑをも笑ひ、いかなる誤りをし、物をうち散らし、あさましきわざをしたれども、いひがひなしとて、荒き声をも立てず。冬寒きころは、小侍どもわが衣の裾の下に臥せて、つとめては、かれらが朝寝したれば、やをらぬき出でて、思ふばかり寝させけり。召し使ふにも及ばぬ末のものなれども、それがかたがまのものの見るところにては、人数なる由をもてなし給ひければ、いみじき面目にて、心にしみて、うれしと思ひけり。②かやうの情けにて、ありとあるたぐひ思へ

つきけり。人の心を感じしむとはこれなり⁹。(下線は引用者)

下線部①にあるように、清盛の若かりし頃の話であるが、目下の者の不始末にも鷹揚であり、冬の寒い頃には小侍たちを自分の衣の裾で寝かせたり、彼らが朝寝坊すると、そっと抜け出して思う存分寝かせてやったりした。また、身分の低い者でも、その家族や知り合いの知っている前では一人前に扱うので、その者は、大変な名誉と思い、心底喜ぶのであった。そして、下線部②のように、情をかける清盛にありとあらゆる人々が心服するのであった。『十訓抄』は鎌倉時代、建長四年（1254）に成立した説話集なので、前時代への回顧趣味的な色彩が強いが、目下の者に対する思いやり溢れる清盛や子の重盛の人物像を好意的に記している。しかし、この説話も清盛の若かりし頃、と断っている。その後、権力を掌握した後の清盛像が暴君へと豹変するのは歴史が雄弁に物語っている。後世、権力の座についた秀吉や信長も然り、権力とは、かくも人格を換えてしまう魔力を持っているのだろうか。また、『平家物語』巻第六「築島」は清盛の人道主義的な側面を次のように伝えている。

又何事よりも、福原の経の島について、今の世にいたるまで、上下往来の船のわづらひなきこそ目出けれ。彼島は、去る応保元年二月上旬に築はじめられたりけるが、同年の八月に、にはかに大風吹、大波たッて、みなゆり失ひてき。又同三年下旬に、阿波民部重能を奉行にてつかせられけるが、人柱たてらるべしなソど公卿御僉議有しか共、「それは罪業なり」とて、石の面に一切経をかひてつかれたりけるゆへにこそ、経の島とは名づけたれ¹⁰。(下線は引用者)

史実では、承安三年（1173）となっているが、清盛は大和田の泊に人工の島の築造に着手するも、大風、大波によって島が滅失してしまう。再び、阿波民部重能に島を再築させるも、工事は難航する。そこで、公卿たちが人柱を立てるよう評議したが、下線部分のように清盛は「それは罪業なり」といって、

人柱ではなく、石に一切経書きとめ、海に沈めたのである。また、平治の乱後、敗者である源義朝の子頼朝を池禅尼の懇願を受け入れ、伊豆に配流する寛大な処置をとったり、後に以仁王を担いで平氏を裏切ることになる源頼政を温情から三位に叙してやったり、そして、一門の要である親子関係にも心を砕いて対応しているのである。これも清盛の心ばえや人柄、寛大さといった全人的な威光を示すものであり、ヒューマニストとしての一面がうかがえるところである。

2. 一門の思想

「武門源氏の思想と信仰」において、源氏がその武力・武威を絶対化させるために、武門のヒエラルキーの頂点に立つ棟梁は臣下や同盟者、果てはその陪臣に至るまでの絶対的な命令系統を確立する必要があった、と述べた。武門の絶対的な命令系統を確実なものにするためには、その背景に武家社会全体に共通した何らかの思想・信仰の統制が必要となってくる。絶対的な思想や信仰統制の構築が武門の成立と存続の最大要件となる。源氏の思想とは忠義の思想であった。武門の棟梁に対する絶対的忠義は武門の棟梁に対する「忠義→服従→死」という図式に直結し、家臣の盲従的な主従観に結びついた。そして、この忠義の思想は八幡信仰とも密接に結びついていったのである。

では、武門平氏の場合はどうであろうか。忠義の思想は、源氏同様、平氏の思想を支える根幹的な存在であったと推測できるが、果たして、武門源氏に見られる忠義の思想と八幡信仰のように相関関係が見出せるであろうか。確かに、武門平氏にとって、氏神ともいえるべき厳島信仰が存在したが、源氏の八幡信仰と平氏の厳島信仰の関係には大きな相違点がある。それは、信仰者の質である。信仰者が武士か貴族かによって思想の内容に大きな差異が生じるのである。源平両氏を比較すると、平氏は武士でありながら、その実体は限りなく貴族に近い。平氏は武士でありながら、藤原氏の摂関体制よろしく、白河・鳥羽・後白河の院政内に自己の勢力（外戚関係）を扶植することに専念しすぎた。そのためには、本来の武士の姿からは逸脱した擬似貴族の姿への質的変

容を自ら許容せざるを得なかったというべきであろう。平氏の質的変容は信仰の面にも表れている。末法思想の影響が色濃く反映した院政期には白河、鳥羽、後白河院が自ら出家して法皇となり、熊野詣や高野詣を繰り返した。『平家物語』巻第一「禿髪」には次のように記されている。

①平家かやうに繁昌せられけるも、熊野権現の御利生とぞ聞えし。其故は、古へ清盛公、いまだ安芸守たりし時、伊勢の海より、船にて熊野へ参られけるに、おほきなる鱸の、船に躍り入りたりけるを、先達申けるは、「是は権現の御利生なり。いそぎまいるべし」と申ければ、清盛の給ひけるは、「昔周の武王の船にこそ、白魚は躍り入たりけるなれ。是吉事なり」とて、さばかり十戒をたもち、精進潔斎の道なれども、調味して、家子・侍共にくはせられけり。其故にや、吉事のみうちつづいて、太政大臣まできはめ給へり。②子孫の官途も、竜の雲に昇るよりは、猶すみやか也。九代の先蹤を超え給ふこそ且出けれ¹¹。（下線は引用者）

下線①では、平家の繁栄は熊野権現の利益である、と断言している。武士が中央に進出するためには、貴族の体制や思想、信仰に至るまで、模倣、若しくは盲従せざるを得ない状況に置かれていたことは明らかである。理屈はどうあれ、先ずは朝廷の有職故実や思想、信仰を武士の信仰として取り入れ、擬似貴族へとその姿を変容させようとしたものと考えられよう。その結果、下線②のように、平氏一門は先祖九代の先例を超えたのである。清盛が擬似貴族を実践した例はまだある。清盛が法皇に倣って出家した箇所が『平家物語』巻第一「禿髪」で確認できる。

角て清盛公、仁安三年十一月十一日¹²、年五十一にて、病にをかされ、存命の為に、忽に出家入道す。法名は、浄海とこそ名のられけれ。其しるしにや、宿病たちどころにいへて、天命を全す¹³。

仁安三年（1168）清盛は突然の病に倒れる。原因は寸白（すびやく）——寄生虫による障り——だといわれているが、回復の見込みがないと考えたのか、

清盛は、二月十一日、正室の時子とともに、ついに出家を決意する。天台座主明雲が受戒し、法名は「清蓮」となったが、後に「浄海」と改名される。当時は貴族に出家する風潮があったが、武士が現役のまま出家するケースは極めて稀であろう。戦国時代に武田信玄、上杉謙信等が出家している例は散見されるが、平安後期では、この清盛が権力の座にある武士の出家例としてはその嚆矢と考えていいのではないだろうか。岡野浩二によれば、病氣平癒を目的にした出家が、奈良代から行われていたとする。『日本霊異記』には、罪を滅ぼし、病をいやすために、髪を剃って戒を受け、袈裟を着けて里の仏堂で修行した紀伊国名草郡の女性の例もあり、平安時代には病氣平癒のために僧を招いて受戒することが一般化していたのである。また、岡野は平安時代には天皇家に臨終出家が多く見られることにも言及している¹⁴。清盛の場合は、病気の重篤から、臨終出家と病氣平癒のための出家の両者の意味合いが込められていたと考えられる。しかし、出家後、就任したばかりの太政大臣をたった三カ月で辞任しているところから、清盛は単に擬似貴族、法皇の出家に習っただけでなく、直接支配ではなく間接的に自由な立場で政治に影響を与えようとする意図があったのかもしれない。

しかし、清盛は武士の信仰を貴族の擬似信仰に留まらせておくだけでは飽き足らなかったのである。平氏の氏神を厳島神社に求め、それを平氏独自の信仰にまで高めたのである。平氏一門を悉く貴族化させてしまった結果、源氏のような武門の思想と信仰、つまり忠義の思想と八幡信仰を武家の統制システムに構築することができなかったのである。平氏と厳島信仰についての詳細な考察は後述することにする。

ここで、平氏一門の思想の特徴について考えてみたい。源氏は、平安時代中期に河内源氏初代の源頼信が、平忠常の乱（1028）を鎮圧し坂東に武門統制の布石を打った。子の源頼義、孫の義家の時に、前九年・後三年の役で坂東武士を傘下に収め、特に八幡太郎義家の時に代表的な源氏の棟梁となった。しかし、義家が嘉承元年（1106）七月一日に没すると、源氏の棟梁は義家の四男義忠と決められていたにもかかわらず、弟の義綱と義光の間に源氏の棟梁の座をめぐる内訌が生じた。原因は義綱父子が義忠の殺害であった。義綱の甥、為義が追討使に命ぜられ

る。義綱は京を逃れるが、捕らえられて出家するも配流先の佐渡で追い詰められて自害する。挙句の果てに、義綱の子は義弘をはじめ六人が悉く自害して一家は壊滅してしまう。この事件の顛末は、義光が真の犯人であり、義綱一家の義忠殺害は冤罪であったことが判明する。ところで、義綱の追討使となった甥の為義のその後は、保元元年（1156年）、保元の乱において、為義・義朝父子の壮絶な戦いを余儀なくされた。為義は頼賢、為朝ら一族と共に崇徳上皇方についたが、子の義朝は平清盛らと後白河天皇方につく結果となった。奮戦むなしく為義は子の義朝に敗れ、東国へ落ち延びようとしたが、降伏し、出家する。しかし、義朝の助命も叶わず、為義は実の子義朝によって斬首されたのである。後の頼朝も弟の義経を追い詰め自害させてしまい、源氏は頼朝亡き後、頼家、実朝の僅か三代で滅び、結果的に平氏である北条政権が鎌倉幕府を継続させていくことになる。このように、代々、源氏は血で血を洗う、身内同士の内訌に明け暮れた武門ということができるが、平氏には身内同士の殺戮劇は少ない。清盛は源氏の為義、義朝父子の争いを目の当たりにし、平氏一門の結束を心に誓った筈である。『平家物語』巻第一「吾身栄花」ではその平氏一門の思想がうかがえる。

吾身の栄花を極るのみならず、一門共に繁昌して、嫡子重盛内大臣の左大将、次男宗盛中納言の右大将、三男具盛三位の中将、嫡孫維盛四位少将、すべて一門の公卿十六人、殿上人卅余人、諸国の受領・衛府・諸司都合六十余人なり。世には又人なくぞ見えられける¹⁵。（下線は引用者）

下線部のように、清盛には我が身の栄華を極めるだけでなく、平氏全体が共に繁栄しなければならないという平氏一門思想が根底にあったように思われる。その思想の背景には保元・平治の乱において源氏の血族争いが即一門の破滅に繋がる危険性を察知した清盛自身の体験があったのである。

竹内理三は、平氏が源氏より一歩先に政権を得た重要な内部条件として、その族制をあげている。竹内は『平家物語』長門本の記述を引用し、婿取婚か

ら嫁取婚への婚姻様式の変化に伴い、単婚世帯が集団化し、この集団が、中世の武家社会では、父夫婦、息子夫婦がそれぞれ一軒一軒単婚世帯をなし、それが集まって父系的——惣領制の大集団をつくり、これが戦闘単位ともなり、戦闘力の強弱は、この集団の質と量によって決定される。いわば中世の武家社会を支える社会構造である、と述べている¹⁶。竹内が指摘する平氏の族制が源氏との差別化を生み、平氏が独自の一門の思想を構築した要因ともいえそうである。

しかし、この思想も程度問題である、『平家物語』巻第一「禿髪」では悪い意味での平氏一門の思想がうかがえる。

六波羅殿の御一家の君達と言ひて、しかば、花族も栄耀も、面を向へ、肩を並ぶる人なし。されば入道相国のこじうと、平大納言時忠卿ののたまひけるは、「此一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」とぞのたまひける¹⁷。（下線は引用者）

これは『平家物語』において二位殿の弟平時忠が語った有名な言葉であるが、ここまでいくと平氏の一門の思想も極まり尽した感が拭えない。奇しくも、『平家物語』の冒頭で我々に語りかける、「奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ¹⁸」は時忠の言葉と表裏一体をなしているのである。特に、治承三年の政変以降、平氏政権を確立した清盛には奢り高ぶり、武士どころか人としての道を外す言動が多くなって、人心を掌握することはもはや不可能となった。そして、権力を極めつくした平氏の辿りつく道は破滅であった。

3. 女人平氏の思想と信仰

次に平氏の女たちの「死にざま」から武家の女の思想について考えてみたい。平時子（1126—1185）は先に触れたように、高望王の兄高棟王の系譜であり、その源流は、平清盛同様桓武天皇に遡ることができる。家筋は諸大夫の階層で、五代前の義行以降ずっと四位止まりであったが、代々摂関家の家司を勤めており、有職故実に通じその系譜は「日記の家」

と称された¹⁹。時子は、同じ平氏でも、武家ではなく下級貴族の女であったが、清盛の正室になると、従二位、出家後は二位の尼と呼ばれた。同母弟には権大納言平時忠、異母妹には平滋子（建春門院）がいる。清盛との間に宗盛、知盛、徳子（建礼門院）、重衡らをもうけた。「日記の家」から天皇の国母となった人物であるが、清盛亡き後は、時子が平氏の家長、いわば一門の影の棟梁的存在となった。次に『平家物語』巻第十一「先帝身投」から時子の武士の「死にざま」ともいうべき箇所をあげてみよう。

①二位殿は、このありさまを御らんじて、日ごろおぼしめしもうけたる事なれば、にぶ色のふたつぎぬうちかづき、ねりばかまのそばたかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてまって、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。君の御ともに参る也。御心ざし思ひまいらせ給はん人々は、急ぎつゞき給へ」とて、ふなばたへあゆみ出でられけり²⁰。（下線は引用者）

この二位殿の「死にざま」は、『平治物語』(中)「義朝敗北の事」における、義朝が正清に養育させていた姫の「死にざま」を髣髴とさせる。その場面は義朝が六波羅合戦で敗北し、鎌田正清の進言により一旦退却することになったが、義朝が将来を慮って正清に姫を殺害するよう命じるところである。

②姫君宣ひけるは、「敵にさがし出され、義朝の女よなど引しろはれ、恥をみんこそこゝろうけれ。[あはれ] 高きもいやしきも女の身ほど口惜かりけることはなし。兵衛佐殿は十三になれども、男なれば、軍して父の御供して落るぞかし。わらはゝ十四になれ共、女の身なればおもふにかひなし。あはれ我を害して、父御前の見参に入よかし。」²¹（下線は引用者）

両者の「死にざま」に鑑みるに、恥の意識と名誉を重んじる点では、武士である男よりも、武門の家に己の生死を託す弱い立場にある女の方にその「死にざま」により強い倫理感が認められる。武門の家に生まれながらも、男（武士）ではなくて、女とし

て生まれた負い目、つまり女の性としてのコンプレックスは、①の二位殿の場合は「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。君の御ともに参る也。御心ざし思ひまいらせ給はん人々は、急ぎつゞき給へ」、②の義朝の姫君の場合は「高きもいやしきも女の身ほど口惜しかりけることはなし。兵衛佐殿は十三になれども、男なれば、軍して父の御供して落るぞかし。わらはゝ十四になれ共、女の身なればおもふにかひなし」という言葉にあらわれている。源平両氏を問わず、この女であるという負の生死観が、却って、武士以上の「死にざま」を求める倫理意識、言い換えるならば、恥の意識と名誉意識を女たちの心性に宿させていたと解釈できよう。義朝の姫君や二位殿の「死にざま」には、敗走して敵に捕らわれ斬首された武将とは比較にならないほどの潔さがある。

次に、二位殿の信仰について考察してみよう。『平家物語』巻第十一「先帝身投」にその手がかりがあるように思われる。寿永四年（1185）、平氏と源氏の最終決戦となる壇ノ浦の戦いで、いよいよ平氏が滅亡の時を迎える。取り上げるのは神璽と宝剣を身につけた二位殿が孫の安德天皇を抱えて、壇ノ浦の急流に身を投じる場面である。

③「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによって、いま万乗のあるじとむまれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。i. まづ東にむかはせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからむとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし。この国は粟散辺地とて、心うきさかみにてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき処へ具しまいらせさぶらふぞ」となくなく申させ給ひければ、山鳩色の御衣に、びんづらゆはせ給ひて、御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしおがみ、伊勢神宮に御いとま申させ給へ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば、ii. 二位殿やがていただき奉り、「浪のしたにも都のさぶらふぞ」となぐさめたてまって、ちいろの底へぞ入給ふ²²。（下線は引用者）

下線部 i を見ると、「まづ東にむかはせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ」とある。二位殿は安德天皇に天照大御神を祀る、天皇家のルーツともいふべき東の伊勢神宮への暇乞いを勧め、続いて「其後西方浄土の来迎にあづからむとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし」とあるように、安德天皇に阿弥陀如来の来迎にあずかるべく、西方浄土への念仏を勧めた。安德天皇は平氏の血を引く天皇であるが、武士ではなく、あくまでも天皇である。二位殿も平氏の女でありながら、天皇の祖母であり、天皇家の女という立場でもある。平氏の氏神は厳島神宮であるが、安德天皇には暇乞いを勧めることはなかった。安德天皇は武士としての平氏という立場でなく、あくまでも神々しい天皇という立場で最後を遂げていただきたかったのかもしれない。したがって、先ずは天皇家のルーツともいふべき伊勢神宮に暇乞いを優先させたのであろう。二位殿だけが入水するのならば、厳島神宮に向かって暇乞いをしたかもしれない。この場合、二位殿には武家の立場でありながら、天皇家の立場にもいる複雑な想いがその思想や信仰の根底に存在したと思われる。

下線部 ii では、二位殿が「浪のしたにも都のさぶらふぞ」と安德天皇を慰め奉って入水するのだが、浪のしたの都とはどんな都だろうか。平氏は海と縁が特に深い。清盛が日宋貿易の航路のため開削した音戸の瀬戸²³や福原、大輪田泊の修築、水上の神殿ともいふべき厳島神宮の造営、瀬戸内海の水軍との関わりなど、枚挙に暇がないほどである。平氏の滅亡の場所も壇ノ浦で海上であったことも因縁深い。清盛亡き後の影の棟梁ともいふべき二位殿が「浪のしたにも都」といった思想の背景には平氏と海の縁があったと考えるべきであろう。また、「浪のしたにも都」信仰には浦島の竜宮城の伝説に基づく、竜宮城信仰があったように思われる。『平家物語』灌頂巻「六道之沙汰」で平家滅亡後、建礼門院（平徳子）が安德天皇と平氏一門の菩提を弔っていた。後白河法皇が大原の女院を訪れた際に、女院は生涯を仏教の六道輪廻にたとえて法皇に物語った。次の場面は女院が源氏に捕らえられ播磨国明石の浦に着いた折に、転寝で、二位殿と安德天皇と入水する夢を見た

ことを法皇に語る場面である。

④さて武士共にとらはれて、のぼりさぶらひし時、播磨国明石浦について、ちッとうちまどろみてさぶらひし夢に、昔の内裏には、はるかにまさりたる所に、先帝をはじめ奉て、一門の公卿・殿上人みなゆゝしげなる礼儀にて侍ひしを、都を出て後、かゝる所はいまだ見ざりつるに、「是はいづくぞ」とひ侍ひしかば、弐位の尼と覺て、「竜宮城」と答侍ひし時、「めでたかりける所かな。是には苦はなきか」ととひさぶらひしかば、「竜畜経のなかに見えて侍らふ。よくゝ後世をとぶらひ給へ」と申すと覺えて夢さめぬ²⁴。（下線は引用者）

建礼門院が夢見た内容とは、③の壇ノ浦で二位殿と安德天皇が身投げする部分である。③で二位殿は「浪のしたにも都のさぶらふぞ」といっているが、④で女院は二位殿と思しき方が、下線部のように「竜宮城」と安德天皇に答える夢を見ている。これは女院の単なる夢かもしれないが、当時、竜宮城信仰のようなものがあつたと考えることができよう。竜宮城といえは、浦島太郎伝説が連想されるが、この伝説は、古くは『日本書紀』「雄略二十二年条」や『丹後国風土記』（逸文のみ残存）にある「筒川嶋子 水江浦嶋子」、そして『万葉集』巻九の高橋虫麻呂作の長歌（歌番号 1740）に「詠水江浦嶋子一首」等の資料が存在する。この竜宮城は、安德天皇が、「めでたかりける所かな。是には苦はなきか」と聞かれているように、不老不死が約束されている、いわば常世の世界、もしくは道教、神仙思想の影響を受けたものと考えられる。ましてや、平氏一門が滅びようとしている時を迎え、幼い安德天皇は別にしても、平氏の影の棟梁ともいふべき二位殿にとって、平氏の本拠地ともいふべき海へ身を投じることには平氏の心の故郷に回帰する意味合いがあつたのではないだろうか。

4. 平氏と厳島信仰

厳島神社は、広島湾に浮かぶ厳島の北東部、弥山北麓に鎮座している。厳島は別名「安芸の宮島」とも呼ばれ日本三景として夙に名高い。厳島神社『御

鎮座記』によれば、厳島の神が降臨した年が、推古天皇即位元年（593）であり、その時が神社の創建とされている。しかし、角重始は、『日本後紀』弘仁二年（811）七月十七日条に「伊都岐島神」という名で出てくるので、これが確かな文献上での初見であろうと指摘している²⁵。御祭神は宗像三女神（市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命）であるが、『源平盛衰記』や『平家物語』長門本には、厳島に流れ着いた三女神を佐伯鞍職がお祀りしたという記述もあり、その縁起譚には興味深いものがある。この宗像三女神は海の神・女人往生の神、つまり竜女という重層的な神々が混在しているが、室町時代以降、弁財天信仰もはじまるようになった。

厳島神社と平氏の繋がりは、仁安三年（1168）平清盛が現在も海上に立つ大規模な社殿を造営したことにはじまる。清盛は社殿を造営しただけに留まらず、厳島神社を平氏の氏神にし、厳島信仰にまで高めた。清盛が厳島信仰を持つようになった経緯は『平家物語』巻第三「大塔建立」に記されている。清盛が中宮徳子の出産祈願を厳島神社に願いをかけたところ、中宮は間もなく懐妊し、無事皇子が誕生した。『平家物語』巻第三「大塔建立」では、その靈験あらたかな厳島神社と清盛の結びつきについて記している。その箇所をあげてみたい。

抑平家、安芸の厳島を信じ始られける事はいかにと言ふに、鳥羽院の御宇に、清盛公いまだ安芸守たりし時、安芸国をもつて、高野の大塔を修理せよとて、渡辺の遠藤六郎頼方を雑掌に付られ、六年に修理ををはしぬ。修理をはつて後、清盛高野へのぼり、大塔おがみ、奥院へ参られたりければ、いづくより来る共なき老僧の、眉には霜をたれ、額に浪をたゝみ、かせ杖のふたまたなるにすがって出き給へり。良久しう御物語せさせ給ふ。「昔よりいまにいたるまで、此山は密宗をひかへて退転なし。天下に又も候はず。大塔すでに修理おはり候たり。さては安芸の厳島、越前の気比の宮は、両界の垂迹で候が、気比の宮はさかへたれ共、厳島はなきが如に荒れはてて候。此次に奏聞して、修理せさせ給へ。さだにも候はば、官加階は、肩をならぶる人もあるまじきぞ」²⁶
（下線は引用者）

清盛が安芸守のとき、高後鳥羽院の命により、高野山の大塔の修理を承った。六年の歳月をかけて大塔修理を完成させると、清盛は高野山に参り、大塔を拝み、奥の院に参拝した折、霜のように白い眉と、額が浪のように皺深い老僧がどこからともなく現れた。そして、下線部のように「安芸の厳島神社と気比の宮は金剛界・胎蔵界の垂迹だが、気比の宮は栄えているが、厳島はまるでないかのように荒れ果てている。このついでに奏上して、修理しなされ。そうすれば、官位昇進は他に肩を並べる者がいないでしょう」と清盛に告げた。話の信憑性は『平家納経』の願文でも確認できる。『平家納経』は平氏一門がその繁栄を願い、厳島神社に奉納した經典であるが、その内訳は法華經三十卷、阿弥陀經一卷、般若心經一卷、平清盛自筆の願文一卷と、経箱・唐櫃からなる。合計三十三卷に込められた観音の三十三応化身思想に基づいたものと考えられている。清盛をはじめ、一族郎党、平氏一門三十二名が一人一卷ずつ写経をしたとされる。また、通常の願文は漢学者の起草、能書家の公卿の手によるのだが、『平家納経』の願文を清盛自身が起草、清書しているところに清盛独自の思想がうかがえる。この自筆の願文にも、高野山の件に触れている箇所があるので、その信憑性を裏づけるものである。厳島信仰以前に、平氏一門が主要な政権内の高官の座を占めるためには、天皇家や摂関家の貴族の帰依する宗教を踏襲し、法華經信仰、熊野信仰、密教等を信仰することが成り上がりの武家政権にとっては必要最低限の要件だったものと思われる。この辺に平氏が純粋な意味での武家政権から程遠い、藤原氏垂流貴族政権に甘んじざるを得なかった一因でもあろう。しかし、信仰面に関しては、清盛は少なくともこの状況に疑問を持っていた筈であり、政権維持のためにも新たな信仰対象を模索していたに違いない。しかも、中央から束縛されない、日宋貿易の要ともいべき瀬戸内の厳島神社は格好の対象となったのであろう。そして、平氏が西へ都落ちした理由については、宗教的権威と武力が結びついた地域軍事勢力に再起を期したと考えられる。上横手雅敬は、平氏が厳島神社の地域軍事政権の拠点にしようとした根拠について、畿内の皇室・貴族・社寺等の旧勢力の残存をあげている

が²⁷、旧勢力、特に社寺等の旧勢力の残存、つまり中央の束縛とはどのようなものであったのであろうか。『平家物語』巻第四「厳島御行」から検証してみたい。

同三月上旬に、上皇安芸国厳島へ御幸なるべしと聞えけり。帝王位をすべらせ給ひて、諸社の御幸のはじめには、八幡・賀茂・春日なソどへこそならせ給ふに、安芸国までの御幸はいかにと人不審をなす。
(中略) 山門大衆いきどをり申す。「石清水・賀茂・春日へならずは我山の山王へこそ御幸はなるべけれ。安芸国への御幸は、いつのならひぞや。其義ならば、神輿を振りくだし奉て、御幸をとどめたてまつれ」と僉議しければ、これによってしばらく御延引ありけり。太政入道やう　　になだめたまへば、山門の大衆しづまりぬ²⁸。(下線は引用者)

治承四年(1180年)三月上旬、高倉上皇が、安芸国の厳島神社に御幸するという話が伝わって、人々は「天皇が位を譲ったのちの諸社への御幸始めは、八幡、賀茂、春日へおいでになるのだが、安芸国まで御幸するとはいかなることか」と不審に思った。すると、比叡山延暦寺の大衆が憤慨して、「天皇が譲位してから最初の御幸は、八幡・賀茂・春日でないのなら、当山の山王権現へこそ御幸するべきなのに、安芸国へ御幸はいつの先例に倣ったものか。どうしても厳島神社へ御幸するというのなら、神輿を繰り出して御幸を阻止奉る」と協議した。その結果、高倉上皇の厳島神社への御幸はしばらく延期を余儀なくされた。しかし、平清盛が骨を折って延暦寺を宥めたので、山門の大衆は静まったのである。下線部のように、比叡山側の主張は、譲位後の天皇の御幸始めは、八幡・賀茂・春日の三社でなければ、比叡の山王権現であるべきだ、ということであった。この状況こそ旧勢力の強大さを物語るものであろう。最終的に、清盛が宥めすかした格好となったが、そもそも、厳島信仰は地域軍事力を備えた平氏独自の信仰といえよう。かつて、拙稿「武門源氏の思想と信仰」において、源氏が武門の絶対的な命令系統を確実なものにするために、忠義の思想と八幡信仰を絶対的な命令系統の中核としたことについて考察し

たが、そのような機能が平氏の厳島信仰に見出せるだろうか。当然のことながら、瀬戸内の水軍や平氏一門に連なる近隣の武士は厳島を信仰せざるを得ない状況だったと推測できるが、史料から武士の厳島信仰の事例を探ることは難しい。しかし、『平家物語』巻第二「徳大寺厳島詣」では、藤原公能の子、藤原俊成の甥で、藤原定家の従兄弟にあたる徳大寺左大臣実定は、平宗盛に先を越され、大将になれず、世をはかなんで屋敷に引きこもっていたが、ある月の晩に蔵人大夫重兼に出家をほのめかす。困り果てた重兼は実定に平家が信仰する安芸の厳島へ七日間参籠するよう勧めた。そして厳島神社の内侍に正直に大将になりたい旨を伝えるよう指示する。重兼は、実定が帰京する際、めばしい内侍たちを同伴させれば、彼女らは西八條の清盛邸を訪ね、入道相国(清盛)に徳大寺殿が大将にならんがために七日参籠した旨を伝えるだろうと予想し、きっと清盛は感激して、実定を大将に就任させるだろうと見込んだのであった。案の定、事は重兼の予想通り進み、清盛は次のように内侍たちに答えた。

其時入道うちうなづいて、「あないとをし。王城にさしもたつき霊仏・霊社のいくらかましますをさしをいて、我崇奉る御神へ参つて、祈申されけるこそ有がたけれ。是ほど心ざし切ならむ上は」とて、嫡子小松殿、内大臣の左大将にてまし　けるを辞せさせ奉り、次男宗盛大納言の右大将にておはしけるを超えさせて、徳大寺を左大将にぞなされける²⁹。
(下線は引用者)

下線部のように、清盛は、都にいくらか神社仏閣はあるのに、あえて平氏の信仰厚い厳島に参詣したことがよほど嬉しかったようで、嫡子小松殿(重盛)が左大将だったのを辞職させ、次男宗盛が右大将だったのを超えさせ、徳大寺を左大将に就任させたのである。清盛の人のよさがうかがえるが、内容はともかく、平氏の氏神に貴族が平伏する姿は、武家が公家を凌駕したと考えたのであろう。ところが、源氏のように思想と信仰を結びつけた形跡はあまり認められない。平氏一門の繁栄を託す氏神的な存在を超えることはなかったように思われる。確かに、平

氏への忠義の証として、厳島を信仰する武士は瀬戸内の水軍をはじめとして数多く存在したと考えられるが、源氏の忠義の思想と八幡信仰のような明確な統制の構築意図はなかったようである。

結語

平安中期から中世における武士、特に源氏と平氏は、糾える縄の如く武門の興亡を繰り返した。その系譜は鎌倉、室町、戦国、安土桃山、江戸時代、そして、武士が消滅する明治時代へと連綿と連なる。冒頭で述べたように、本稿は「武門平氏の思想と信仰」と題し、拙稿「坂東武者の思想と信仰」「武門源氏の思想と信仰」の研究成果の延長線上にある。研究の目標は、武士の勃興、変遷する過程における、思想や信仰の実体に迫り、日本人の思想の源泉を探ることであった。大雑把に捉えると、日本の歴史の約一千年は武士がかなりの部分で大きな影響を及ぼしたと考えられる。武士の中でも、源氏と平氏とはその最たる存在であろう。源氏と平氏の源流は天皇家に遡ることができるが、武家と公家、加えるに寺社は三位一体の關係にあり、日本の思想、信仰、文化形成に大きく関わってきたことは周知の事実であろう。当該研究は、その中でも特に中世武士に注目し、別けても源氏と平氏の思想と信仰について論考を重ねてきた次第である。

さて、本稿では、『平家物語』をテキストとし、武門平氏の思想と信仰について考察してきたが、1. 平氏の棟梁清盛では、将門を滅ぼした貞盛の系譜を辿った。貞盛流が、正衡の代で、伊勢平氏の祖となり、その子正盛が伊勢平氏の武門の棟梁となったことが、伊勢平氏が院と結びつく契機となった。子の忠盛の代になると、白河法皇に寵愛され平氏はその勢力をますます発展させたが、鳥羽院の代になると、忠盛が日宋貿易に着手し、密貿易で巨万の富を蓄えた。だが、平氏の繁栄は忠盛の子、清盛の棟梁としての才覚によるところが大きい。進取の気性、経済力、発想力、独創性、粹に囚われない自由闊達な行動力等に鑑みるに、清盛は武門の棟梁として類稀な資質を持ち合わせていた。就中、武士である清盛が平安末期において重商主義政策をとって日本経済に活気を与えた革新的な功績には余りあるものがある。

この対宋貿易振興政策が平氏の武家政権を成立させる大いなる原動力となったのである。しかし、清盛の異常なまでの栄達振りは、彼の棟梁の資質だけでは説明がつかない。白河院の御落胤説を『平家物語』巻第六「祇園女御」から清盛の生い立ちのヒントを探った。清盛の人格的威光が反映された武威、つまり棟梁の知識と知恵、心ばえや人柄、寛大さといった全人的な威光を『十訓抄』七ノ二十七や『平家物語』巻第六「築島」から考察した。

続いて、2. 一門の思想では、平氏の厳島信仰に源氏の忠義の思想と八幡信仰のような相関関係を求めることはできなかった。それは、疑似貴族の信仰の域を脱しえなかったからである。平氏は武士でありながら、中央にその勢力を扶植するために、藤原氏の摂関体制の如き、擬似貴族の姿への質的変容を許容せざるを得なかったのである。平氏の質的変容は信仰の面にもあらわれている。『平家物語』巻第一「禿髪」には熊野権現による平氏の繁栄や清盛の出家の件が記されているが、朝廷の有職故実や思想、信仰を武士の信仰として取り入れ、平氏が擬似貴族へとその姿を変容させようとした証ともいえよう。源氏の身内同士の内訌と比較して、平氏には身内同士の殺戮劇は少ない。『平家物語』巻第一「吾身栄花」から平氏一門の結束の思想を確認した。しかし、この一門の思想も度を越すと、平時忠の言葉「此一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」という悪しき一門の思想になって、平氏一門を滅亡に追いやる危うさを持つのであった。

3. 女人平氏の思想と信仰では、『平家物語』巻第十一「先帝身投」から平時子の武士の「死にざま」から、女人の思想や信仰について考えた。時子の「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ」という言葉は『平治物語』(中)「義朝敗北の事」における、源義朝が正清に養育させていた姫の「死にざま」を髣髴とさせる。「高きもいやしきも女の身ほど口惜かりけることはなし。(中略) わらはゝ十四になれ共、女の身なればおもふにかひなし。あはれ我を害して、父御前の見参に入よかし」といった女の意地には源平の武門の差は見受けられない。また、平氏の滅亡する壇ノ浦の戦いで、神璽と宝剣を身につけた二位殿が孫の安徳天皇を抱えて、壇ノ浦の急流

に身を投じる時に、武家でありながら、天皇家でもある微妙な立場における平氏の女の思想を読み解いた。また、『平家物語』灌頂巻「六道之沙汰」では、建礼門院（平徳子）が夢の中で、「浪のしたにも都のさぶらふぞ」と安徳天皇を宥め身投げした二位殿が安徳天皇に竜宮城と答えている夢を見た点に着目し、当時の女たちの間に竜宮信仰が広まっていた可能性についても触れた。

4. 平氏と厳島信仰では『平家物語』巻第三「大塔建立」から、その霊験あらたかな厳島神社と清盛のむすびつきについて考察したが、同巻第四「厳島御行」や同巻第二「徳大寺厳島詣」から旧勢力、特に社寺等の旧勢力の残存、つまり中央の束縛から逃れるためにも平氏独自の厳島信仰を既成事実化しようとした清盛の意図を検証できたものと思う。

以上、『平家物語』を手がかりとして、平氏武門の棟梁、平清盛をはじめとする平氏一門の思想や厳島信仰から、武門源氏と異なる系譜を辿った武門平氏の実像に迫った。武家の棟梁たる清盛の人物像から、ある程度までは平氏一門の思想を明らかにすることはできたが、源氏の忠義の思想と八幡信仰を比較の対象とし、平氏の厳島信仰に源氏のような思想統制のシステムがあったのかという考察については充分とはいえない。今後はその点について研究を更に進めていきたい。

- ¹ 「坂東武者の思想と信仰」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』12号、2011年5月
- ² 「武門源氏の思想と信仰」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』13号、2012年5月
- ³ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）岩波書店、1991年、6頁。
- ⁴ 『尊卑文脈』では良将となっているが、『将門記』『扶桑略記』『今昔物語集』では良持となっている。
- ⁵ 一般的に、良文流（土肥、千葉、秩父、畠山氏等良茂流（三浦、和田、大庭、梶原氏等）といわれているが、全面的には信じがたい。
- ⁶ 維衡の兄維将から、後に源頼朝に加担し平氏を滅ぼす北条一族を排出している。
- ⁷ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）、前掲書、354頁。
- ⁸ 同上、355－356頁。
- ⁹ 浅見和彦校注・訳『十訓抄』小学館、1997年、

336－337頁。

- ¹⁰ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）、前掲書、349－350頁。
- ¹¹ 同上、12頁。
- ¹² 『平家物語』では十一月十一日となっているが、史実では二月十一日である。
- ¹³ 梶原正昭・山下宏明、前掲書、12頁。
- ¹⁴ 服藤早苗編『王朝の権力と表象』森話社、1999年、28頁。
- ¹⁵ 同書、14頁。
- ¹⁶ 竹内理三『竹内理三著作集』第6巻 院政と平氏政権、角川書店、1999年、219頁。
- ¹⁷ 同書、13頁。
- ¹⁸ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）、前掲書、5頁。
- ¹⁹ 高橋昌明『平清盛 福原の夢』講談社、2007年、35頁。
- ²⁰ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（下）岩波書店、1993年、294頁。
- ²¹ 永積安明・島田勇雄 校注『保元物語・平治物語』岩波書店、1966年、238－239頁。
- ²² 同上、294－295頁。
- ²³ 清盛が一日で工事を完成させるために夕日を招き返し、工事安全祈願のために人柱の代わりに「一字一石の経石」を海底に沈めたという伝説がある。
- ²⁴ 同上、405－406頁。
- ²⁵ 『厳島神社千四百年の歴史』NHK 広島放送局、1999年、72頁。
- ²⁶ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）、前掲書、151－152頁。
- ²⁷ 大下正男『厳島』美術出版社、1964年、41頁。
- ²⁸ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）、前掲書、201－202頁。
- ²⁹ 同上、118頁。

(Received: May 31, 2016)

(Issued in internet Edition: July 1, 2016)